

毛利から続く広島の産業DNA

TRANS-BANCO-FORMATION

～広島に流れる「水平循環型」経営の正体～

【歌崖の響き】 【関係者用・調整中】



企業研修用資料

1. 中世の金屋子信仰

毛利と加計隅屋の主従関係

吉水園 砂鉄採取の禁止 安芸十り

須佐から日本海に向けたサプライチェーン

薩長芸同盟 偽金づくり

2. 加計隅屋鉄山絵巻

労働者の視点 画家 佐々木古仙齋

3. 三段峡と鼓鑄夫（こちゅうふ）の遺言

滝山川ダムカルテット 歌崖（うたがえ）の響き

旧下山発電所 加計発電所

帝国製鉄

野島（技術） 林（資金、煉瓦） 隅屋（担保）

鎌倉幕府 大江広元から毛利氏への系譜

1. 大江広元：鎌倉幕府の初代政所別当として源頼朝を支えた京下りの官僚。経済（鉄）の流通を管理しました。
2. 毛利季光（広元の四男）：父から譲り受けた相模国毛利荘（現在の神奈川県厚木市周辺）を本領とし、地名にちなんで「毛利」を名乗りました。
3. 毛利経光（季光の子）：宝治合戦（1247年）で父・季光が自害した際、越後国柏崎（鉄の供給地）にいたため生き残り、家系を繋ぎました。
4. 安芸国吉田荘：経光の四男・時親（ときちか）が下向し、たたら製鉄を掌握しながら、毛利元就（戦国大名）へとつながる基礎を築きました。

中国山地は砂鉄が豊富で、燃料となる木炭を作るための広大な森林があり、高温を維持するのに不可欠な燃料の供給が安定しているため、質の高い鉄の精錬ができました。

中世の「金屋子信仰」

1. 自律的な地域コミュニティ：製鉄職人たちは、特定の主君よりも先に「金屋子信仰」で結ばれ、技術者同士が「ギルド」のような横のつながりを持っていました。毛利氏が直接すべての作業員を雇うのではなく、各地域に「鉄師」と呼ばれる有力な経営者（リーダー）を配置しました。
2. 地域完結型の組織：鉄師は山林や職人を抱える経営者であり、毛利氏は「年貢の免除」や「移動の自由」を与える代わりに、割鉄の優先納入を求めました。採掘、製炭、精錬、運搬が各鉄師の裁量で完結しており、現場の判断が速い「分権的な組織」でした。
各セクションの担当者が横一列で連携しなければ鉄は完成しません。このコミュニティを一つの山内（ユニット）として扱い、内部の自治を認めることで、職人の士気と生産性を維持しました。
3. 技能職の尊重：農民が戦時に徴兵されるのに対し、製鉄に関わる者は「生産に専念」させることが組織上の暗黙の了解でした。この役割分担と高報酬が、戦時下でも生産力を落とさない水平的な安定感を生みました。
4. 中世の古文書：白鷺伝説（金屋子）の古文書が「清神社（毛利）」で発見されています。

隠岐守護・佐々木清高

加計隅屋・佐々木家の由緒によれば、先祖は**隠岐国の守護**を務めていた**佐々木清高**（ささき きよたか）に遡るとされています。

1. **歴史的背景**: 佐々木清高は、隠岐に配流された後醍醐天皇の監視役（のち逃亡）を務めた人物として知られています。鎌倉幕府が滅亡した後、清高の子である**佐々木富貴丸五郎**が安芸国加計に逃れ、土着したのが加計佐々木氏の始まりという伝承があります。

2. **鉄のネットワーク**: 佐々木氏は近江源氏をルーツに持ち、各地に広がった一族ですが、加計の地で**寺尾銀山の開発**や製鉄業（たたら製鉄）で成功したのは、武士としてのネットワークや、鉱山に関する知識が継承されていたためと言われています。

3. **文化的背景**: こうした「隠岐の名門守護の末裔」という誇りが、後に広島藩主を招くほどの文化的な教養や、吉水園のような壮麗な庭園を造営する経済力・精神的基盤となりました。

加計隅屋の家紋は、佐々木一族に共通する「四つ目結（よつめゆい）」です。これは隠岐の佐々木家（隠岐氏）とも共通であり、安芸の山奥にあっても自分たちが源氏や隠岐守護の流れを汲む名門であることを示しています。

毛利氏との主従関係

1. **毛利氏との関係**: 佐々木氏（加計隅屋）は、安芸国の有力国人であった毛利氏の有力な家臣（主従関係）として仕えていました。

2. **加計城（五輪山）**: 加計城は佐々木一族の居城でした。毛利元就の中国統一に向けた戦いにおいて、地元の資源や流通に精通した存在、瀬戸内に向かう太田川が重要でした。

3. **豪商のはじまり**: 江戸時代に入ると、佐々木氏の一族は武士の身分を離れ、やがて「隅屋」という屋号を掲げる豪商（鉄山師）へと転身しました。毛利との主従関係から始まり、鉱物資源の知識を活かしながら、広島藩の鉄座を預かるなど、製鉄業で莫大な富を築きました。単なる商人にとどまらず、地域の経済や文化を支える存在として広島藩からも厚い信頼を得ていました。



吉水園の造営 庭師・清水七郎右衛門

1. 京都からの招聘 : 吉水園は、1781年(天明元年)に加計隅屋16代当主・佐々木八右衛門正任によって造営されましたが、現在の姿は、京都から招かれた清水七郎右衛門の手によるものです。加計隅屋は鉄座を預かる豪商であったため、広島藩主・浅野家との繋がりも深く、藩主が愛した庭師を京都から呼び寄せることが可能でした。浅野家の別邸である縮景園(広島市)の改修を手がけた人物として知られています。

2. 三度にわたる改修: 清水七郎右衛門は、1788年から1807年にかけて三度にわたり園内の改修を行い、より洗練された「池泉回遊式庭園」に整えました。

庭師の技が光る見どころ

1. **借景の技法**: 園内の「吉水亭の高座」から見える風景を眺めると、下流に向かう太田川（川舟）や、遠くの間々が一体となって見えるように設計されており、京都の高度な造園技術が反映されています。裏山（五輪山）には大朝方面に向かう**鉄の道**がありました。

2. **名勝指定**: 庭園内の池泉を中心とした環境は、かつて加計城で毛利氏を支えた武士の血統が、江戸時代には鉄を通じて地域を潤す豪商となり、その文化的な遺産として現在の「吉水園」へと受け継がれています。

五庵のあるところ？

隅屋の本宅内には、土塀に囲まれた**3畳の茶室（藪内流）**があり、にじり口の奥では政治的な密談がされていました。のちの、土間の「赤レンガ」は近代化（帝国製鉄）の象徴であり、正面の国道（商店街）も加計発電所工事のために拡幅されました。芸備銀行跡（文化財）は勘定場があったところ。

広島藩・砂鉄の残土流出による公害問題

太田川上流域の砂鉄採取による残土（マサ土）流出による「太田川の氾濫」「広島城の堀の堆積」「環境への悪化」が問題となりました。

1. **砂鉄採取（かんな流し）の禁止**: 中世から兆候はありましたが、浅野氏の時代になると、公害問題として砂鉄採取が厳しく制限されました。寛文10年（1670）のこと。加計を拠点とする隅屋は、太田川水系での砂鉄採取が困難になり、石見へと展開せざるおえなくなりました。中世からの毛利（長州）との関係が、さらに深まった出来事でした。

PS: 松江藩（奥出雲）の場合、鉄山師（御三家+6）と数と生産量を、一子相伝として厳重に管理することで、斐伊川の洪水や堆積を管理した。

原材料 砂鉄・木炭

1. **砂鉄の調達**：山から、僅かに鉄分のある**マサ土**を崩して、谷川に流しながら選別した。石見（現在の島根県西部）の三隅（井野）、旭や邑南が主な産地で、**大規模な棚田**が残されている。「農閑期」の冬の仕事でした。

2. **炭の調達**：西中国山地に広がる**広葉樹林**を伐採しながら「炭焼き」がされた。大炭（たたら用）小炭（鍛冶用）、**30年の伐採サイクル**や植林によって維持管理された。

3. **小金8里、炭10里**：江戸時代の陸路運搬での**物流の採算性**を表した言葉で、砂鉄・木炭の搬入距離の目安でした。

4. **太田川の川舟**：川舟は低コストなので、山陰からの長い陸路をカバーしました。集荷された鉄は、隅屋の裏の**月ヶ瀬**から、広島城下（可部・広島市内）へ運ばれ、広島から大坂、さらに全国へ供給され、広島藩の財政基盤に大きく貢献した。

物流インフラの規模（手配含む）

1. 馬（陸上輸送）：約1,000頭以上

隅屋は自前で数百頭の馬を所有していたほか、近隣の農家から徴用・契約した馬を含めると、常に**1,000頭を超える規模**の馬がサプライチェーンに組み込まれていました。隅屋前から吉水園、五輪山へと辿る尾根道は、大朝（芸北）や瑞穂（邑南）へとつながる「**鉄の道**」でした。

2. 川舟（太田川輸送）：約100隻～150隻

太田川の浅瀬や急流に対応した「ひらた川舟」を**100隻以上**確保していました。加計の荷揚場（月ヶ瀬）から広島まで、鉄製品や木炭を効率よく大量輸送するために使われました。

3. 海舟（海上輸送）：数隻～10隻程度

広島を拠点とする「海白波（かいはくは）」などの有力な船主と提携、または自社で**数隻の大型船**を保有して運用していました。広島から中央市場である「大坂（大阪）」へ鉄を運ぶために、大型の北前船や専用の運送船を使用していました。

安芸十り（あきてんり）

江戸時代～



広島市郷土資料館 所蔵

イカリ・ノコギリ・マサカリ・ヤスリ・カミソリ・ハリ・キリ・クサリ・チギリ・オモリ

船場（ふなば）

江戸時代



安芸十り（じゅうり、てんり）

隅屋が供給した鉄は、広島城下でヤスリ、イカリ、針、鎖などの鍛冶産業（安芸十り）の原料となり、広島城下で**経済圏**を形成しながら、現代のモノづくり産業の基礎を築きました。

流通は、おおよそ8割が広島側、2割が長州側とされるが、幕末期は長州への供給が増え、山越えの陸路（三隅、益田）が使われました。

PS：「てんり」は、明治以降に「現場」で使われ始めたと思われる。

日本海への「全方位戦略」

1. 運用形態（ルート）：瀬戸内海ルートは、幕府や他藩の監視が厳しく、通行税などのコストもかさみました。そこで、山陰側の須佐を確保し、そこから北前船ルート（日本海～九州）に乗せることで、瀬戸内海を通らずに鉄を送り出すルートを構築しました。山陰側への取引は全体の20%、幕末期に増大しました。

山越えルートは、三隅（井野）から砂鉄を馬の背にのせて山越えし「たたら製鉄」の現場に搬入、帰りには割鉄や銅などを日本海側まで運び出しました。広島藩の経済を隅屋が支えていたので、藩外との商売は黙認されていました。他に邑南向けにも進出しました。

須佐を起点にした「海のルート」

1. 鹿児島：加計隅屋は、生産した鉄を北前船などの海運を利用して九州方面へも運びました。特に薩摩（鹿児島）とは、鉄の販売や、錫や黒砂糖や唐物などの物資調達を通じた密接な**交易関係**がありました。

2. 媽祖（まそ）：中国の航海安全の女神です。長崎や鹿児島（野間池）などの寄港地で信仰されており、中国との交易に関わる人々や、加計隅屋のような大規模な海運・交易を行う商人の間で広く信仰されました。

3. 須佐・高山黄帝（こうやまこうてい）：須佐（萩）の「高山」には、中国神話の聖王である黄帝を祀る「高山黄帝社」があります。加計隅屋は、鉄の積出港であった須佐において、航海安全の守護神として黄帝を崇拝し、この社の造営や維持に深く関わりました

4. 異国信仰の「隠れ蓑」：幕府の目が届きにくい長州の地で、中国由来の黄帝や媽祖を祀ることは、薩摩や長崎、さらにはその先の海外を見据えた「自由な交易」を象徴する、加計家独自のアイデンティティとなっていました。





拠点	役割	関連する信仰
加計（安芸）	鉄や銅の生産・経営の中心	金屋子（たたら製鉄の神）
須佐（石見・長州）	積出港・海運拠点	黄帝社（磁石・造船の神）
野間池（薩摩）	錫・砂糖・唐物の仕入先	媽祖神（航海の神）

広島城の堀を埋めるはずだった「砂鉄」の代替を石見へと、密貿易で長州や薩摩へと繋いだ隅屋の経営判断は、まさに国内屈指のロジスティクスと言えます。「藩境を越えた物流網」があったからこそ、隅屋は幕末まで続く富を築きました。

幕末の「密貿易」と鉄の供給

幕末、長州藩（毛利氏）は幕府から「朝敵」とされ、武器や物資の調達が困難になりました。ここで隅屋が果たした役割は決定的です。

1. 「鉄」の独占供給：隅屋は萩藩領（須佐）で流通させた鉄を、長州藩の軍制改革（大砲・銃の铸造）のために優先的に供給しました。
2. 物流と情報のハブ：加計は広島藩領でありながら長州藩領に隣接しており、幕府側の監視が厳しい海岸線を避け、山越え（匹見、三隅）で物資や情報をやり取りする密ルートの拠点となりました。

「薩長芸同盟」と隅屋のネットワーク

吉水園は、幕末の志士たちの密談の舞台であったと伝えられています。

1. 三隅・須佐ルート：隅屋が拠点とした港は、薩摩藩の船が長州へ武器（ゲベル銃やミニエー銃）を運び込む際の隠れ港として機能しました。
2. 中継地としての役割：隅屋は広島藩の御用を勤めつつ、裏では長州藩の活動を支える「両属」の状態にありましたが、その内情は長州側に深く傾斜していました。
3. 政治的サロン：隅屋の広大な私邸と吉水園は、広島藩の尊王攘夷派や、山を越えてきた長州藩の志士たちが接触する絶好の場所でした。本宅内には土塀で囲まれた3畳ほどの茶室（五庵）があり、密談に利用されました。
4. 保護と支援：隅屋（佐々木家）は莫大な富を背景に、追われる志士たちを秘かに匿い、活動資金を提供しました。広島藩の神機隊（しんきたい）や長州藩の志士たちが交流する「政治的聖域」でした。

吉水園を訪れた「幕末の志士」たち

1. 木戸孝允（桂小五郎）：長州藩の重臣であり、薩長同盟の立役者。彼は幕府の追及を逃れる際や、広島藩との連携を模索する中で、隅屋の軍資金やネットワークを利用しました。（懺悔の人、ストレス疾患）
2. 西郷隆盛（さいごうたかもり）：薩摩藩の実質的な外交・軍事のトップとして、倒幕に向けた軍資金の調達や諸藩との連携を仕切る「中心人物」という立ち位置にありました。（同志、西南戦争、滅びの共有）
3. 辻将曹（つじ しょうそう）：広島藩の執政。長州藩とのパイプ役であり、隅屋を介して長州側の動向を探り、幕府との仲裁（長州征伐の回避など）に動ききました。

広島藩「神機隊」との密接な関係

幕府が長州を包囲した「長州征伐」の際、瀬戸内海の海上封鎖が強まる中、隅屋が管理する山越えの道（加計～三隅・益田・須佐）が生命線となりました。

広島藩の中で最も早く倒幕に動いた軍事組織「神機隊」は、隅屋から強力な経済的支援を受けていました。戊辰戦争で東日本まで転戦しますが、その装備や活動費の一部は、隅屋が扱う鉄の利益によって賄われていました。

このように、吉水園は単なる美しい庭園ではなく、「鉄・資金・情報」という三種の神器を操る隅屋が、毛利家（長州）を勝利へ導くために運営した幕末の指令塔の一つだったのです。



なぜ全国各地で「贋金」を作ったのか

薩摩藩や長州藩などの有力諸藩は、倒幕に向けた**最新兵器の購入**や軍事費の増大により、慢性的な資金不足に陥っていました。当時は、幕府の統制力が弱まり、藩が独自に通貨（藩札や模造貨幣）を偽造しても、取り締まりが困難な状況にありました。また、幕府自身も偽札を作りました。

「南原屋（なばらや）贋金事件」

安芸（広島藩）における贋金づくりで最も有名な事例は、現在の広島市安佐北区可部を舞台とした「南原屋贋金事件」です。

1. **場所**：可部は古くから鋳物の町として知られていました。豪商の南原屋（木坂家）が中心となり、広島藩の関与があったとされる組織的な偽造が行われました。
2. **軍事力の近代化**：広島藩の精鋭部隊「神機隊（しんきたい）」の結成や最新武器の購入など、倒幕に向けた軍備拡張のための莫大な資金が必要でした。
3. **鋳造技術**：可部周辺には高度な鋳造技術を持つ職人が集まっており、精巧な贋金を作る土壌が整っていました。材料の「銅」は、寺尾（加計）大塚（大朝）から、「錫」は、薩摩（須佐経由）から、鋳造の場所は、加計、鈴張、可部南原の山中でした。
4. **投獄**：幕府に知られ、事件の責任を負う形で**豪商・南原屋（木坂 文左衛門）**が死亡しました（明治2年）。可部にはこの悲劇を伝える碑や供養塔などが残され、広島藩の犠牲となった忠義の豪商として語り継がれています。

翌年には、加計隅屋が製鉄業から「**完全撤退**」しました。贋金で広島藩の借金を肩代わりし、海外から買った武器で倒幕に貢献した事実は、明治政府の政治的なタブーとして「**極秘**」にされてきました。

製造数：約 31 万枚。

種類：「天保通宝」「二分金（にぶきん）」が造られたと伝えられています。

発見数：0 枚。非常に精巧に造られていたため、本物と見分けがつかず、現在に至るまで1枚も見つかっていないと言われています。



「加計隅屋鉄山絵巻」 (江戸後期)

1. 産業の記録としての重要性: 江戸時代、中国山地一帯は日本の鉄生産の一大中心地であり、加計はその中でも主要な鉄山師「隅屋」の本拠地でした。当時の砂鉄採取、木炭製造、高殿（たたら場）、鍛冶場での作業工程、使われた道具類などが極めて写実的に描かれており、鉄山経営を知る上で第一級の歴史資料です。鋳物の製造に代表される伝統的な国内鉄産業の基盤となった技術を今に伝えています。

2. 上下2巻の絵巻物: サイズは、第一巻が長さ約740cm、幅約24cm、第二巻が長さ約760cm、幅約24cmで、合計約15メートルに及ぶ長大な記録資料です。この絵巻は、その地域の産業と文化を具体的に示す資料として、広島県により重要文化財に指定されています（昭和36年）。



天秤鞆の仕組みと「画期的な発明」

加計隅屋鉄山絵巻の中でも最もダイナミックに描かれている、たたら製鉄の「心臓部」です。天秤鞆（てんびんふいご）は、江戸時代中期に島根県川本町で開発された大型の送風機です。それ以前の「踏鞆（ふみふいご）」に比べ、生産効率が飛躍的に向上しました。

1. **構造:** 長い板（天秤棒のような役割）の両端に風箱があり、真ん中に支点があります。
2. **動作:** 板の両端に人が乗り、交互に踏み込むことでシーソーのように動き、絶え間なく炉に空気を送り込みます。
3. **番子（ばんこ）の由来:** 天秤鞆の労働はあまりに過酷なため、番子（労働者）を交代しながら行われました。これが「かわりばんこ」という言葉の語源になったと言われています。

絵巻に描かれた「踏み手（番子）」のリアル

絵巻には、この過酷な作業に従事する人々が描かれていますが、ここでも古仙斎の「現場視点」が光っています。

1・**過酷な労働環境**: 炉の熱気と戦いながら、リズムを崩さずに踏み続ける様子が、浮き出た血管や筋肉の描写から伝わります。手伝いの女性や子供が描かれる部分もありますが、古仙斎の絵巻では「鉄山という巨大なシステムの歯車」としての日常が非常に写実的に描かれています。

2. 内部構造の透視図的表現:

古仙斎の絵巻では、本来は見えないはずの鞆の内部構造や、床下の空気の通り道（地下構造）などが、まるで設計図のように理解しやすく描かれている部分があります。

現場を知り尽くした「労働者絵師」

隅屋（加計家）の鉄山で、鉄を叩き延ばす「大鍛冶（おおかじ）」という重労働に従事していた家の出身と言われています。

1. **絵師としての腕**: 現場の人間だからこそ、高殿（たたら場）の熱気、職人の筋肉の動き、道具の使い方の細部までを完璧に把握しており、それが絵巻の圧倒的なリアリティに繋がっています。

2. **下絵と見まがう「ライブ感」**: 古仙斎の絵巻は、火花の散る様子や職人の息遣いを伝えるため、伝統的な日本画の描き方よりも、**スケッチのような躍動感**があります。



絵巻に描かれた「左利きの動作」

大鍛冶は、熱した鉄の塊を大きな槌（つち）で叩き延ばす過酷な重労働です。絵巻を詳しく見ると、槌を振り下ろす職人たちの手の位置や体の向きが、通常の右利きの動作とは逆に見える箇所があります。

1. 交互に叩くための工夫：大鍛冶では複数の職人がリズムを合わせて交互に鉄を叩きます。狭い空間で互いの槌がぶつからないよう、あるいは効率よく力を伝えるために、あえて左右対称の構え（右構えと左構え）で向かい合って作業していたという説です。これが現代の言葉「かわりばんこ（代わり番子）」の語源の一つとも言われています。（BANCO）

2. リアルな観察：作者の佐々木古仙齋自身が大鍛冶の家系出身であったため、現場に実在した左利きの職人や、特定の工程で必要だった「逆の手」の動きを、美化せずそのまま写実的に描き込んだ可能性があります。

3. **フォーメーションの要**：向かい合って槌を打つ際、左利きの職人がいると、右利きの職人と交互に打つリズムがよりスムーズになり、作業効率が劇的に上がるとされていました。

4. **手合（てごう）**：現在でも方言として使われますが、当時の文献『鉄山必用記事』には、「左利きの向槌は給料が高い」という記述があります。優秀な「一流の職人」を揃えていたという、経営者としての誇りを表現しているとも言えます。

この絵巻は、単なる美術品を超えて、広島モノづくりの原点（ヤスリや針、そして現在の自動車産業へ続く技術）を伝える「**生きた産業資料**」として、今も圧倒的な価値を放っています。

「下絵」としての価値

1. **描き込みの特異性**：専門家は「作業の記録・下絵としての要素が強い」と指摘しています。描ききれなかった部分への**紙の継ぎ足し**があり、これは「美しさ」よりも「現場のすべてを漏らさず記録する」という下絵的記録としての執念の表れと見なされています。

2. **修業と帰郷**：古仙斎は青年期に鉄山絵巻を残した後、京都や北陸へ出て絵師としての研鑽を積み、晩年に故郷の大朝へ戻りました。

3. **焼失の可能性**：本画が広島浅野図書館で「被爆焼失した」という仮説もありますが、この加計に残された絵巻こそが、「**装飾を削ぎ落とした、最も真実に近い記録**」として、歴史学・考古学的には、それ以上の価値を持っていると言えるのではないのでしょうか。



江戸末期（1859） 佐々木古仙齋 島根県邑南町市木 加計正弘氏蔵

佐々木古仙齋と「大朝・瑞穂」との繋がり

1. 生家跡の現存：現在も大暮には、古仙齋の生家跡や、彼が描いたであろう大鍛冶場跡、製鉄の神様を祀る金屋子神社（かなやごじんじゃ）が残っています。
2. 神社の絵馬：周辺の神社には、古仙齋が絵師として大成した後に描いた絵馬や掛軸が今も残されています。
3. 晩年の絵画：青年期に「記録・下絵」として情熱をぶつけたのが「加計隅屋鉄山絵巻」であり、晩年の円熟期に「狩野派絵師」として筆を振るった「水ヶ迫タタラ絵図」は、加計に向かう山越えの「鉄の道」です。

古仙齋は芸北大暮の鉄山（大鍛冶）で生まれ、鉄と絵画に一生を捧げました。大朝の西教寺に墓があります。

後の「齋藤露翠（1865～1943）」は大朝（大塚）の生まれで、加計隅屋との婚姻関係があります。（加計隅屋文庫、目録編纂、書記）



明治9年 愛媛県生まれ 三段峡の写真撮影に没頭したのは何故だろうか??

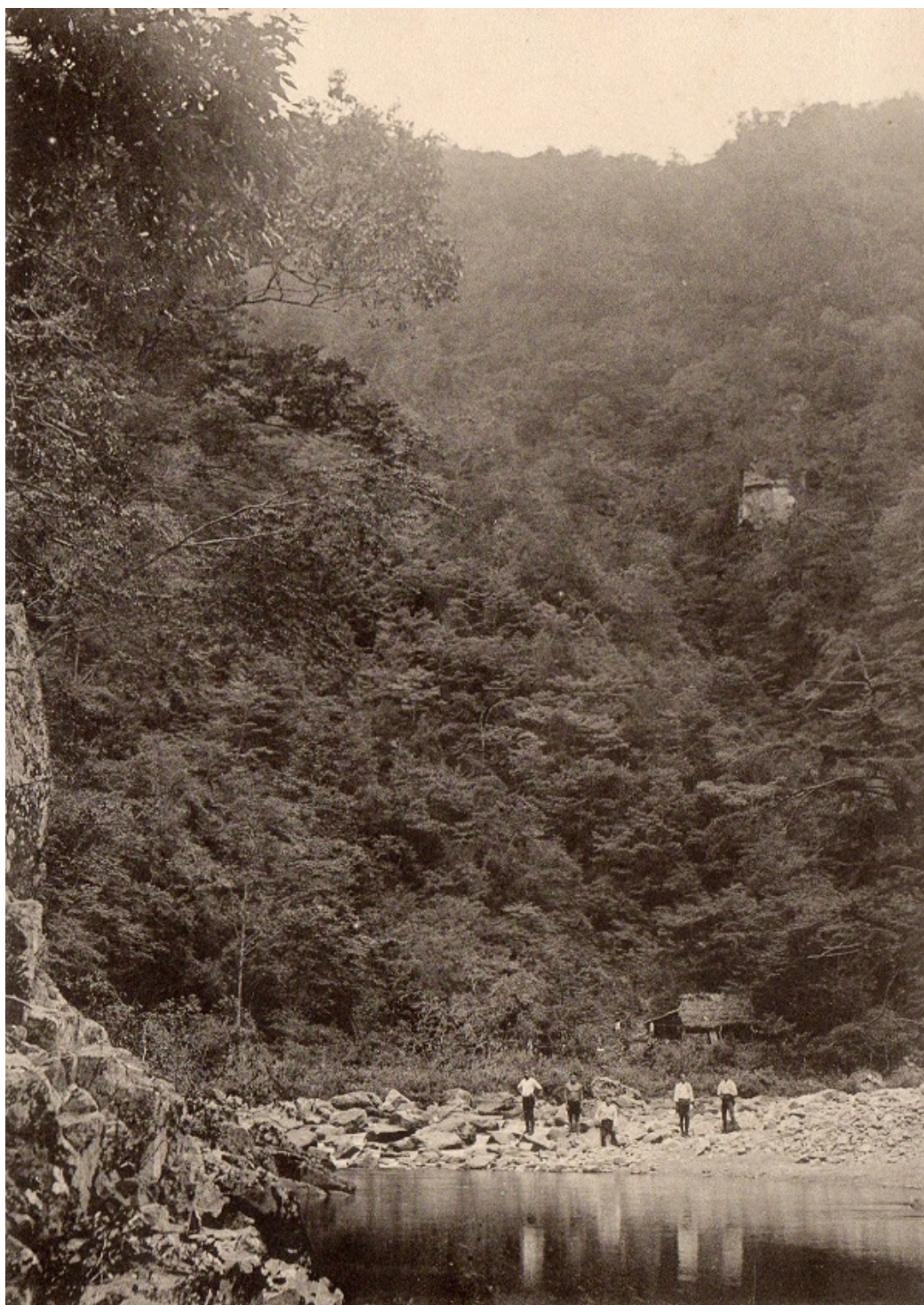
「三段峡の開発」と歴史的背景

中世や江戸時代から続く鉄山師・加計隅屋は、三段峡を含む西中国山地一帯の広大な山林を所有していました。三段峡周辺でも「たたら製鉄」「炭焼き」がされていました。

1. **観光開発:** 近代産業が盛んになると、柴木川の豊富な水量と険しい峡谷は水力発電の敵地として注目されました。しかし、写真家の熊南峰（くま なんぼう）らによる保存運動により、国の特別名勝に指定され、過度なダム開発から景観が守られた経緯があります。
2. **事業資金の担保:** のちの「帝国製鉄」は近代的な製鉄事業を展開するにあたり、加計隅屋の所有する広大な山林を、萩の金融機関（林安二郎）への担保として差し出していました。帝国製鉄加計工場への計画変更に伴ない、これらの権利関係が整理の対象となりました。
3. **水利権の担保:** 開発を断念する代わりに、県や町が買い上げ、公的な保護下に置くプロセスが発生しました。この「民から官へ」の権利移行があったからこそ、三段峡は民間の乱開発を免れ、現在もその原始的な美しさを保つことができます。

熊南峰（写真家）と齋藤露翠（加計隅屋）

紹介者とされる「熊南峰」の初版写真帖の付録に、炭焼き小屋と製鉄労働者の墓（左隅手前）の写真があります。新聞とカメラが発達した時代よりも、もっと古くから三段峡の峡谷に生きた「労働者の証」として。



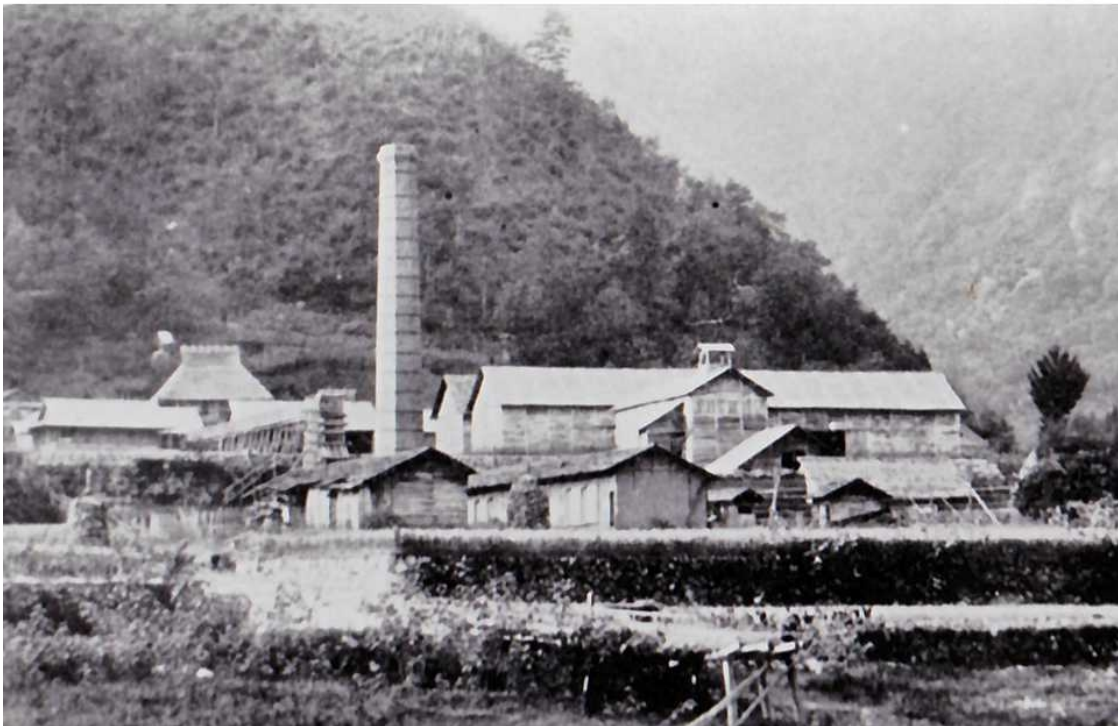
「鼓鑄夫（こちゅうふ）」の遺言

1. **安芸三段峡三十三景**：熊南方が大正11年にこの「葦が原」を紹介した際、単なる「墓地」ではなく、「古の職人たちが眠る、詩情あふれる聖地」として描きました。彼は三段峡の岩や滝に「龍門」「縮景」など中国風の名前をつけ、この墓地も「幽玄な東洋の美」として紹介しました。
2. **鼓鑄夫とは**：中国の古典的な表現で、火を熾すための「ふいご（鼓）」を吹き、金属を「鑄（ちゅう）」じる労働者を指します。江戸時代、たたら製鉄の最前線で働いた労働者たちへの尊称として名付けられました。
3. **環境**：三段峡のような深い溪谷の奥で、砂鉄を運び、大量の炭を焼き、1000度以上の熱気の中でふいごを動かし続け、昼夜を問わず3日3晩も火を絶やさないう過酷な労働がありました。労働者たちは「集落（山内）」を作り、独自の信仰（金屋子）を持っていました。
4. **たたら場跡**：「水梨」には江戸中期のたたら場跡があり、周辺の河原では風化して丸くなった鉄滓（カナクソ）が見つかります。

近代化という巨大な装置にのまれながら、そして静かに死んでいった労働者の墓石が残る「葦が原」。足元には、彼らの「遺言」が、今も水の音と共に響いているのです。

「恐羅漢の原生林」と歴史的背景

1. **入植と集落の形成**：恐羅漢山（安芸太田町横川）周辺は、西中国山地で最後まで残された森林資源でした。やがて北側の広大な原生林が、帝国製鉄によって伐採されました。莫大な燃料（木炭）を確保するため、職人や農民が周辺地域から入植、集落を形成し、学校までありました。たたら製鉄の衰退によって余剰となった労働力が製炭業に吸収された側面がありました。
2. **鉄滓（カナクソ）の再利用**：戦時下での特需の際には、過去のたたら製鉄で捨てられていた「カナクソ（鉄滓）」から鉄を抽出するため、村を挙げての掘り出し作業が行われ、帝国製鉄で再利用されました。



野島国次郎と帝国製鉄加計工場

1. 官営広島鉄山（三次）：明治時代、政府がたたら製鉄の近代化と保護を目的として、現在の広島県三次市布野に設置した「広島鉄山」がありました。西洋の高炉技術が導入される中、伝統的な木炭を用いた「たたら製鉄」を改良する試みがされました。

2. 野島国次郎：広島鉄山に出入りし技術を習得しながら「木炭銑鉄」の優位性に執着し、大量生産の西洋鉄に対して「和鉄のメリット」を最後まで守り抜こうとした実業家です。鉄滓のリサイクルにより、西城・東城・大暮で、一定の成果を得たのち、帝国製鉄加計工場を操業しました。

3. 水利権の移行：三段峡の水利権と背後の恐羅漢をベースに進んだ「ダム計画」は、滝山川に移され、加計発電所によって安定操業した。

帝国製鉄の高品質の木炭銑鉄は、国内生産の7割のシェア、呉海軍工廠や八幡製鉄に納品された。

林安二郎と奈古（阿武）の耐火煉瓦

帝国製鉄の大正7年の操業時、すでに「高炉の命」として組み込まれていた。

1. **野呂景義博士による選定**：帝国製鉄を指導した「近代製鉄の父」野呂景義博士は、八幡製鉄所の再建（1904年）において林安二郎の耐火煉瓦を絶賛し採用しました。加計での「**野外高炉という前代未聞の挑戦**」において、博士が最も信頼したのが奈古の煉瓦でした。
2. 「**電力なし**」を支えた**断熱性**：当時、加計にはまだ安定した電力がありませんでした。送風機が不安定な中で火力を維持するためには、炉外に熱を逃がさない**圧倒的な断熱・耐火性能**が不可欠であり、それが林家の耐火煉瓦に課せられた使命でした。
3. 「**水力発電所**」：当初から事業構想の両輪でしたが、発電所の建設には時間がかかりました。大正7年の操業失敗は、インフラ（電力）が整う前に、戦後恐慌などの社会情勢から操業を急がざるを得なかった「**シンクロ不全**」という、現代の経営にも通じる教訓を含んでいます。
4. 「**トラック輸送**」：昭和初期、それまでの牛馬車や舟運に代わり、トラックが普及し始めた頃です。険しい中国山地を越えるルートにおいて、機動力のあるトラックは重量物である煉瓦の輸送に革新をもたらしました。のちの戦時下では木炭自動車が走りました。
5. 「**資源の限界**」：良質な奈古粘土（礬土頁岩）を掘り進めるコストが、近代的な合成耐火物の流通価格を上回ったこと。林家は無理に事業を延命させず、その資本と情熱を電源開発へと移し、戦後の中国電力の設立へと繋ぎました。

現場力が生んだ「野外操業」の奇跡

建屋を作れないという制約を、奈古煉瓦の「超耐熱衝撃性」という強みで解決した逆転の発想。建屋なしの野外炉という、世界でも類を見ない「攻めの操業」は、理屈（理論）だけでなく、奈古から来た築炉職人と加計の技師による**現場の暗黙知**が支えていました。マニュアルを超えた「職人魂（プロフェッショナルリズム）」の成果です。



松原川の「歌崖（うたがえ）」

1. 危険で急峻で狭い崖道：北広島町の奥滝山峡に沿ってうねった崖道は、馬の離合が難しく、クラクション代わりに歌を歌いながら輸送していました。
2. 作業道：松原川の途中の取水堰から旧下山発電所の上部のサージタンクまで、平坦な馬トロッコ道や導水トンネルが作られました。（大正期）
3. 旧下山発電所：工事用電源の小発電所から延伸が始まりました。現在の「下山発電所」のとなりに遺構があります。続けて、下流の榎の平取水堰、上流の旧王泊取水堰へと工事が進みました。（昭和初期）



1. 旧王泊えん堤跡：現在の王泊ダムの上流側に面したえん堤に、当時のウインチの基礎や吊り橋の橋脚が渇水期に現れ、廃墟・遺構ファンや歴史愛好家の注目を集めています。（昭和10年）
2. 王泊ダム：嵩上げされ現在の王泊ダムが完成し、下山発電所に加えて滝山川発電所への送水が始まり、現在の重層的な発電網システムが構築されました。（昭和34年）



加計発電所（榎の平取水えん堤）

所在地： 広島県山県郡安芸太田町大字加計 帝国製鉄跡地 対岸

最大出力： 16,400 kW 広島県下最大（戦前）

運用開始： 1930年（昭和5年）4月

水系： 太田川水系滝山川

歴史： 帝国製鉄の対岸 100年近く稼働し続けている歴史ある施設

仕組み： 上流にある「榎の平取水場」で堰き止めた水を、**地中トンネル導水官**（約7km）を通じて流し、そこから**落差217m**のパイプ水圧を利用して発電しています。

地域振興としての投資： 単なる売電事業としてだけでなく、地元の雇用創出や近代化を目的とした投資としての側面が強かった。この電力が呉海軍工廠に送電され「戦艦大和」を作った。

以下のネットワークが、地元の有力者である加計隅屋と手を組むことで、三段峡の電源開発が滝山川に移行し、広島近代化が大きく進んだ。のち、芸北電気、広島電気、中国電力へと経営が移行した。（匹見、豊川取水堰）

野島家	帝国製鉄の経営・木炭銑鉄の技術・資本調達
-----	----------------------

林家	財務・監査・耐火煉瓦・萩資本の導入
----	-------------------

加計家	水利権・地元調整・土地担保の提供
-----	------------------

TRANS-BANCO-FORMATION

(トランス・バンコ・フォーメーション)

～たたらから近代化へ、広島に流れる「水平循環型」経営の正体～

1. 【哲学】垂直の支配から、水平の共創へ

毛利・加計隅屋の「真の主従関係」:

単なる上下関係ではない。毛利（戦国大名）が場を整え、隅屋（経済）が広域網を動かす、相互不可侵かつ不可欠な「双方向のBANCO（場）」。

企業への示唆: 現代の「元請け・下請け」の関係を、共通の目的を持つ「戦略的パートナーシップ」へ書き換える。

かわりばんこ（番子）の真理: 一人が踏み続けなければ火は消える。交代（循環）があるからこそ、鉄（価値）は生まれる。

2. 【広域網】薩長芸同盟へと繋がる「情報の地脈」

物流から情報のハイウェイへ:

隅屋が築いた鉄の流通網は、幕末、志士たちが駆け抜ける情報のインフラとなった。

企業への示唆: 物理的な製品供給網だけでなく、情報を双方向に流す「ナレッジ・ネットワーク」の重要性。

3. 【継承】三段峡・加計の電源開発から広島近代化への転換

たたら「火」を絶やさない情熱が、三段峡「水」が、奥滝山峡に「場」を移し、電源開発へと変貌しながら「近代化のエネルギー」へと昇華した。

企業への示唆: 技術の形が変わっても、その根底にある「課題解決の意志」を継承せよ。この「形を変えて本質を繋ぐ力」こそが、広島のDX（デジタルトランスフォーメーション）の原点。

4. 【フィールドワーク現場】を「思考の聖地」へ ナラティブガイドの役割:

「ここにはたたら場がありました」で終わらせない。「ここは『垂直の限界を突破した知恵の跡』です」と定義し直す。

企業の経営層が訪れた際、自分たちの組織図を「たたら場」に投影させるための問いかけを行う。

TRANS（変容する役割）：

時代と共に主役は代わり、技術は形を変えるが、その「根底にある協調の精神」は変わらない。

BANCO（現場の仕事）：

それは特権階級の書斎ではなく、汗を流し、道具を研ぎ、機械を動かす「現場の足場」から生まれる。

FORMATION（循環する編成）：

誰一人欠けても鉄は赤くならず、針は尖らず、魚は釣れない。私たちは皆、太田川という巨大なタタラを回し続ける「現代の番子」である。

関係者共有・提供用ベネフィット

地域：「伝統保存」ではなく「現代経営の最先端モデル」として自らの歴史を再定義できる。

企業：A4・30Pに及ぶ重厚な歴史の裏付けが、単なる精神論ではない「勝ち筋の物語」として社員に刺さる。

産業ガイド：観光客向けの解説とは一線を画す、BtoB（研修事業）への高付加価値化。

毛利から続く広島の産業DNA

TRANS-BANCO-FORMATION

～広島に流れる「水平循環型」経営の正体～

【付録・調整中】



企業研修用付録

1. THE FIVE QUESTIONS

2. 湯立て神楽

3. 帝国製鉄の終焉

可部鋳物 広島針 精密機械産業

三段峡たたらの森 (フォレストック認定)

4. いのちの旅

牡蠣 サンショウウオ 宇宙からの隕鉄

PS: 物語の物語は真実か？

紙芝居 「蒸気まんじゅう物語」

紙芝居 「可部南原屋贋金造り事件」

アニメ 「愛の呪文」

AI の時代

PS: 贋金は「革命のホンモノ」

THE FIVE QUESTIONS / 5つの問い

～From TAKA-DO-NORI to BANCO～

1. 【火の維持】

貴社のプロジェクト（火）を燃やし続けるのは、「一人のカリスマ」ですか？ それとも「かわりばんこ（BANCO）」に風を送り込めるチームですか？

垂直の是正：特定の誰かに依存し、風が止まった瞬間に冷え切る組織になっていないか。

2. 【循環の設計】

「下請け・部署」という名の「壁」を築いていませんか？ 毛利と隅屋が共有したような、「共通の富（銑鉄）」を生むための広域ネットワークをデザインできていますか？

垂直の是正：命令系統（ラダー）が、情報の血流を止める「ダム」になっていないか。

3. 【エネルギーの転換】

三段峡から滝山川にシフトし「電気」へと変えたように、貴社の「古き良き伝統（DNA）」を、現代の「新たな動力（DX/GX）」へトランス（変換）させる覚悟はありますか？

垂直の是正：過去の成功体験という重石を、未来への推進力に置き換えられているか。

4. 【現場の尊厳】

最前線の「番子」たちは、自分たちの「地団駄」が世界を揺らす価値（広島近代化）に繋がっていると確信していますか？

垂直の是正：現場を単なる「作業員」として扱い、経営の熱量を遮断していないか。

5. 【主従の再定義】

リーダーの役割は「管理」することですか？ それとも、薩長同盟のように、「異質な個性が繋がり、化学反応を起こすBANCO（場）」を整えることですか？

垂直の是正：ピラミッドの頂点に居座り、水平なチャンスを奪っていないか。



広島・長尾神社の神楽と中世のルーツ

安芸太田町加計の長尾神社に伝わる「湯立神楽」は、室町時代から江戸時代にかけて整備されたと考えられていますが、その源流はさらに古くに遡ります。長尾神社の宮司を務める佐々木家は、**佐々木高綱**の末裔であると伝えられています。高綱は源頼朝の重臣ですが、晩年は出家して諸国を巡ったという伝説が各地に残っています。

1. **由緒**: 創祀は不詳ですが、「安芸国神名帳」にも記される古い歴史を持ちます。
2. **鎌倉神楽の影響**: 湯立神楽は、鎌倉時代に京都の石清水八幡宮から鎌倉の鶴岡八幡宮へ伝わったとされる「鎌倉神楽」と同系統の儀礼です。
3. **神事の形式**: 釜で湯を沸かし、笹で湯を撒くという形式は、中世の修験道（山伏の修行）や陰陽道の思想が混ざり合って形成されました。この地方に神楽が定着する過程で、鎌倉・室町期の古い祭祀形態が保存されたと考えられています。
4. **文化財**: 江戸時代中期以前からの形態を色濃く残していることから広島県無形文化財の指定を受けています。拝殿には江戸時代から昭和にかけての貴重な天井絵馬や、佐々木古仙齋（こせんさい）の絵馬が掲げられています。

湯立て神楽の特徴

全国に湯立て神事がありますが、長尾神社のものは「湯立（神事）」を行った直後に、そのまま「湯立舞」へと移行する形式をとっており、他に類を見ない構成です。3人の舞人によって奉納され、その動きと持ち物の変化が特徴的です。たたら製鉄の現場の熱気を彷彿とさせる様子は、まさにトランスフォーメーションです。

1. **湯立（ゆたて）**：境内に据えた大釜で湯を沸かし、その湯を浴びて無病息災や五穀豊穡を祈ります。
2. **湯立舞（ゆたてまい）**：湯が沸き立つのに合わせて舞が激しくなっていきます。
3. **三段階の舞**：最初は**幣（ぬさ）**と**鈴**を持ち、次に**鈴**と**剣**に持ち替え、最後に**笹の葉**を使って舞います。

動的な演出：煮えたぎる湯を笹の葉で周囲に振りまく動作があり、この飛沫（湯花）を浴びることで厄除けになると信じられています。

音楽との連動：釜の湯が次第に沸き立ってくる様子を、舞と囃子（音楽）のテンポを上げることで表現します。（現在は屋内のため釜は省略）

江戸後期の加計隅屋の寄進

長尾神社の湯立神楽が現在のような形で定着・維持された背景には、江戸時代後期の加計隅屋による強力な支援がありました。

1. **鉄山繁栄の祈願**：隅屋の家史『加計万乗』によると、宝暦4年（1754年）に**鉄山職繁栄祈願**のため、毎年9月15日に湯立神楽を奉納し、舞太刀を寄附したという記録があります。
2. **豪華な寄進品**：江戸後期（宝暦～寛政年間）には、**佐々木八右衛門**らによって、神楽に用いる釜、五徳、太鼓、鈴、そして金襴の衣装などが次々と寄進されました。これらの品々の多くは現在も長尾神社に保管されています。
3. **神楽の源流**：現在の広島で主流の華やかな「石見系神楽」とは異なり、中世から続く呪術的・儀礼的な古い神楽の姿を今に伝えています。

帝国製鉄 安浦（呉）移転 終焉



上記は戦時中と思われる作業風景（本社東城工場）

主力の加計工場は昭和34年（1959年）に安浦へ移転した。のちの「帝国製鉄」の閉鎖は昭和37年頃であり、電気炉の普及が決定的な要因となりました。



電気炉による高品質鉄の量産化

1. **木炭銑鉄の優位性が喪失**：木炭銑鉄は不純物が少なく、かつては軍用や高級特殊鋼の原料として重宝されていました。しかし、昭和30年代に**電気炉**の技術が向上し、安価なスクラップを原料にしながらも、電気制御によって不純物の少ない高品質な鋼を効率よく生産できるようになりました。

2. **コスト競争の敗北**：木炭銑鉄は原料となる木炭の確保に多大なコストと手間がかかります。一方、電気炉は電力とスクラップがあれば稼働でき、量産性でも圧倒的な差がつかしました。それまで「木炭銑鉄でなければ作れない」と言われていた特殊な用途（高級工具や精密機械部品など）の需要が、より安価で品質の安定した**電気炉製の特殊鋼**へと急速に切り替わりました。

原料（木炭）供給の限界

1. **電気炉が普及**：製鉄に不可欠な木炭は、戦後の燃料革命（プロパンガスや灯油への転換）により炭焼き職人が激減し、安定調達が困難になっていました。

2. **海岸への移転**：昭和34年の安浦（呉）への移転は「原料搬入と製品搬出を効率化して生き残る」ための勝負でしたが、わずか3年後の**昭和37年（1962年）**には、電気炉という近代的なライバルとの技術・コスト競争に勝てず、操業を停止することとなりました。

帝国製鉄の終焉

これは、日本における「高炉による木炭銑鉄製造」の歴史が幕を閉じた瞬間でした。何度も倒産し、社名を変えながらの七転八倒の執念の経営でしたが、最終的には「**負債0**」での終焉でした。西洋鉄に対する**木炭銑鉄（和鉄）**の優位性に命を賭けた野島親子（国次郎、福太郎）のケジメでした。

その後・・・

後年、その技術は「**マラヤワタ**」として、マレーシア（途上国）への海外技術援助・国家プロジェクトとして国際貢献しました。（ゴムの木による製炭、鉄鉱石による製鉄）マレーシア製の木炭は、現代のホームセンターで見かけることができます。



可部鑄物の歴史の変遷

1・起源（中世～近世）

可部の鑄物の歴史は非常に古く、**鎌倉時代**から始まったという説があります。太田川の**舟運**の拠点であった可部は、背後に中国山地の**たたら製鉄**による原料供給地を控え、鑄物業が発展する絶好の条件を備えていました。

2．江戸時代の隆盛と「五右衛門風呂」

江戸時代、可部は広島藩の鑄物生産の中心地となり、特に**長州風呂**（五右衛門風呂）の製造で全国的に有名になりました。

3．近代から現代へ

明治から大正にかけても鑄物産業は継続し、1831年（天保2年）創業の大和重工株式会社などの企業がその伝統を引き継ぎました。現在も可部駅前には、鑄物の大釜をモチーフにした巨大なモニュメントが設置され、町のシンボルとなっています。

4．船入堀跡（明神公園）

かつて鑄物製品などを運び出した太田川舟運の発着場の跡地は、可部鑄物の流通を支えた歴史的な場所です。当時の「鉄燈籠」「舟板壁」がモニュメントとして残されています。（JR可部駅近く）





呉海軍工廠から派生した「精密機械産業」

1. 広島針（チューリップ針）：縫い針という極小の鉄製品を研磨し、量産するための「機械そのものを自社設計・製造する」という内製化の極致。「道具を造るための道具」にこだわる広島製造業のプライドが世界に広がる。
2. DAIWA（釣り針、リール）：広島起点・精密旋盤・高機能素材・精密加工技術が、リールの回転機構や極細の釣り針へと結実し、世界ナンバーワンのフィッシング総合企業へ進化した。

「熱管理と洗浄」

1. 大和重工（鋳物）：溶けた鉄を砂型に流し込み、適切な速度で冷却して「銑鉄」の組織を安定させるプロセスなど。
2. チューリップ・DAIWA（針）：焼き入れは、極細の鋼（はがね）に強靱なバネ性と貫通力を与え、水（または油）による急冷がその硬度と粘りを決定づける。
3. サニクリーン（清掃メンテナンス）：製造現場の環境と精度を維持するための洗浄のプロフェッショナル。河川環境と産業を守る循環システムや、精度を維持する管理技術を構築する。

水は熱を奪い、鉄の硬度を制御する触媒として太田川と繋がっている。水は、たたら製鉄の選鉱（カンナ流し）、川舟輸送、呉海軍工廠を支えた電力、さらには精密産業を動かし、技術を磨き上げた「産業の動力源」そのものです。

「三段峡たたら」の森」フォレストストック認定

1. **エネルギー資源の管理**：中世から続く「たたら製鉄」は、膨大な木炭（炭素）を消費するエネルギー集約型産業でした。日新林業（加計隅屋）が管理する「水梨・深入山周辺」は、かつての燃料供給地から、現代においては「**二酸化炭素の吸収・固定能力**」を定量化し、**価値化する森林**（フォレストストック認定地）へと進化しました。
2. **生物多様性と産業インフラの共存**：単なる樹木の育成ではなく、森林の保全が「フルボ酸鉄」の生成を促し、太田川を通じて瀬戸内海の生産力を維持するインフラであると再定義される。カーボンオフセット（CO₂吸収量の取引）という経済的スキームは、太田川流域の産業を支える「負の外部性（炭素排出）」を相殺し、産業全体の持続可能性（サステナビリティ）を担保する。
3. **鉄の循環を完結させる森**：鉄を鍛えるために焼かれた木炭の歴史は、今、炭素を固定し海を太らせる「三段峡たたら」の森」の管理技術へと進化しました。広島「鉄の生態系」における最上流のガバナンス（統治）そのものです。

日新林業株式会社（加計隅屋）が管理する「三段峡たたら」の森」は、森林保全を通じた**カーボンオフセット（二酸化炭素吸収量の価値化）**の先進的な事例となっています。単なる木材生産だけでなく、生物多様性の保全や地球温暖化防止を目的とした適切な管理が行われています。





深入山 たたら馬の餌 牧草地、茅場（かやば）



水梨周辺のたたら遺跡

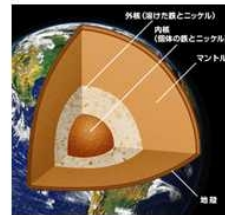
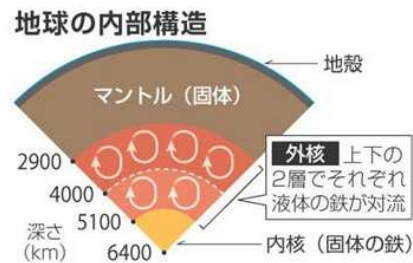


畑山重篤 「鉄は魔法つかい」 「森は海の恋人」 豊かな漁場の背後には鉄がある！

太田川：瀬戸内の「鉄の生態系」

1. フルボ酸鉄の供給路：西中国山地の土壌から溶け出した鉄分（フルボ酸鉄）は、光合成の活性化によって森林を育て、養分は川を経て広島湾（瀬戸内）へと運ばれる。海洋プランクトンが増殖するための「必須の供給ライン」である。
2. 鉄の化学反応：結果として量産される工業製品に近い必然性を持つ。大和重工の鋳物、チューリップの針、DAIWAの道具。これらを生んだ「鉄の文化」は、太田川を通じて海を太らせ、巡り巡ってアングラが手にする「魚」という実利に帰結する。
3. 瀬戸内の復活：鮎や牡蠣の枯渇・・・失われた資源の復活は「自然任せ」では成し得ない。産業の循環を維持し、科学的根拠に基づきフィールドを管理する者だけが、太田川の「鉄の恩恵」を享受できる。

サンショウウオの生息地と砂鉄地帯は重なっている。



地球は鉄の惑星 総重量の34.6% 重たい鉄が内に向かう 宇宙に向かう
長沼毅 「鉄はいのちの物語」 宇宙は鉄を作るために存在している！

鉄の起源：ビッグバンからマントル、そして隕鉄へ

1. 星の終焉が生んだ究極の元素：宇宙開闢（ビッグバン）から数億年後、巨大な星の内部で核融合が繰り返され、核エネルギー的に最も安定した元素として「鉄」が誕生した。超新星爆発という星の終焉によって宇宙空間に飛散した鉄の塵は、重力によって集積し、地球という惑星のコア（核）とマントルを形成する主成分となった。

2. 隕鉄と文明の接触：人類が最初に出会った鉄は、地殻中の鉱石ではなく、宇宙から飛来した「隕鉄（いんてつ）」であった。ヒッタイトをはじめとする古代文明が、星の欠片である鉄を加工し、武器や道具へと変えた歴史は、宇宙の物理法則が地上の「力（パワー）」へと転換された最初の事象である。

3. マントルから太田川へ：地球の深部（マントル）に蓄積された鉄は、地殻変動を経て西中国山地の花崗岩層（真砂土）へと溶け込み「たたら製鉄」の原料となった。私たちが今、太田川で手にする鉄滓（カナクソ）は、数千万年の時を経て地表に現れた「宇宙の記憶」そのものである。



紙芝居の物語は真実か？

1. 蒸気まんじゅう物語：萩や奈古が発祥とされる「蒸気まんじゅう」ですが、萩で上演している紙芝居のストーリーは「ロシアの戦艦を食ってやれ」という威勢の良いものですが、全体のフォルム、煙突の数、国旗（ロシア）に違いがあります。
2. 戊辰戦争：幕府と長州が英国から購入した中古の貨物船に「大砲」を乗せた「壬戌丸（じんじゅつまる）」ではないか。日の丸と長州の旗も史実と同じ。下関の初戦で大破したという悲しい結末・・・
3. 加計の夜神楽：昭和初期から加計の祭（屋台）で売られており、当時から奈古煉瓦や帝国製鉄との関係があったと思われます。



1. 可部南原屋贋金造り事件：可部カラスの会が、幕末の事件を紙芝居にして、加計の月ヶ瀬公園で上演しました。（2014年）
2. 月ヶ瀬：太田川の川舟輸送の「起点の港」です。月が出るから月ヶ瀬か、舟が着くから月ヶ瀬か・・・



アニメ「愛の呪文」は真実か？

1. **炭焼きと女房**：ダム湖に沈んだ温井には似た民話が複数あり、全国的には元となる「炭焼き長者」「へび女房」が多く、類似系は中国や台湾にもある。**読み聞かせ**でイメージした小学生の図画を元に「紙芝居」が作られました。
2. **愛の呪文**：指導した紙芝居作家が、民話にオリジナルストーリーを加えたアニメーション（30分）を作りました。ギャグテイストで、歴史の勉強には異次元のトラジコメディ（悲喜劇）となりました。
3. **地域の違和感**：伝統的な石見神楽ストーリーが**反転**し、アドリブのタタラバダンスが**ブランドイメージ**を壊し、同時にはありえない作業工程が混在し、引用した島根県の動画のレタッチが不完全で当事者が困惑しました。
4. **結果**：ある程度の歴史を理解したうえで鑑賞しないと**誤解**を招くため、WEB公開は見送り「この資料」を活用した研修の場でのみ公開します。作画は、地域に掲示する「おろち絵馬タイル」のお手本になっています。

AIの時代は真実か？

AIには間違いが多いですが、入口を変えながら**多角的**に検索することで、真実に近づきます。物語の始まりはその時点ですでに演出が加えられるもの。

「この資料」はAI検索を重ねながら編集しましたが、フィールドを歩き、職場で汗しながら、貴方の五感で捉えた「**それぞれの物語**」として、心の扉に収めてください。

贋金は「革命のホンモノ」

幕末の動乱期、薩長芸などの諸藩は、軍資金のために密かに「贋金」を鑄造しており、対する幕府も偽紙幣を増刷していました。

1. **隅屋の協力**: 加計隅屋は、高度な製鉄・精錬技術を活かし、長州藩や芸州藩からの依頼で贋金造りに加担しましたが、これは当時の倒幕運動を支える「必要悪」でした。
2. **トカゲの尻尾切り**: 維新が成ると新政府は通貨の安定を急ぎ、旧来の贋金を厳しく取り締まる立場に転じました。諸藩の贋金関与を隠蔽し、実務を担った民間商人に責任を負わせる動きが強まりました。
3. **隅屋の廃業**: 隅屋は新政府から厳しい追及を受け、それまで独占していた鉄山業の特権や利権が奪われてゆきました。結果として、中世から続いた名門・加計隅屋は事実上の廃業へと追い込まれました。

木戸孝允の「懺悔の正体」

木戸は新政府の安定化を急ぐ過程で、恩人である隅屋を公的に救うことができないストレスに苛まれました。

1. **政治家としての非情**: 「法」と「国家の信用」を優先せざるを得ない立場から、個人的な恩義を理由に隅屋を特別扱いすることができませんでした。(変革期の経営者としての苦悩)
2. **内面の自責**: 日記や手紙に綴り、隅屋に贈った「済まない」という言葉には、「自分たちが革命のために利用した恩人を、新国家という怪物が食いつぶしてしまった」という強烈な自責の念が込められています。
3. **孤独なリーダーの末路**: 木戸は、西郷隆盛のように情に流されて反乱を起こすこともできず、大久保利通のように冷徹にシステムを構築しきることもできませんでした。恩人に対しての「情と理の板挟み」を抱き続けながら、若くして45才で亡くなりました。

この物語は、維新という華やかな革命の裏側にあった残酷な真実です。この事件が無かったら、加計隅屋は三菱や住友などの財閥になっていたはずです。

「不屈のトランスフォーメーション」の象徴

幕末の「鉄」から、大正・昭和の「電力」へ。国策に翻弄され、一度は「廃業」という断絶を経験しながらも、保有するアセット（水利権・技術への執念・地域の信頼）を次世代のインフラへと変換させた姿は、変化の激しい現代ビジネスにおける「究極のレジリエンス」のお手本です。

「品質への狂気的な執念」の継承

西洋高炉の時代にあえて「木炭銑鉄」にこだわった野島氏や隅屋の姿勢は、広島製造業（マツダのエンジン技術や、針・砥石などの精密加工）に通底する「一歩も引かないクオリティへのこだわり」の原点です。この「執念」こそが、中央資本（三菱・住友）とは異なる、広島独自の独立独歩の産業精神を形作っています。

「無名の貢献」という美学

広島の戦後復興を支えた電力が、実は幕末の「懺悔」を背負った民間人たちの手によって準備されていたという事実は、「目に見える成功（財閥化）」よりも「持続可能な社会基盤（インフラ）」を選んだという、広島らしい誠実なブランドストーリーになります。

「加計隅屋が守り抜き、木戸孝允が命を削ってまで繋ごうとした『広島のDNA』を、私たちは今、どう形に変えているだろうか？」